

谷崎潤一郎『葵』論

山 崎 澄 子

『葵』は、谷崎潤一郎の十八作目の創作であり、明治四十五年七月二十日から大正元年十一月十八日まで「東京日日新聞」に連載された後、末尾（十二・十三）を加筆し、単行本として、大正二年一月一日春陽堂から刊行された。谷崎にとって、『葵』は初めての長編小説にあたる。新聞連載に際して、『前書』と「後書」が認められているが、とくに「前書」の方は、箇条書状になっており、文頭に○を施した八つの文章で成り立っている。その中で、谷崎は、自身が耽美派と呼ばれることに對する不快感を表明し、『葵』を執筆するにあたって、「きれいな小説を書くつもりではない。」と記した。そして、『後書』は、短文で、以下のよう

に記している。

「葵」は私が生れて始めて執筆した長編小説である。

従つて経験のないため、分量の予測が出来ないで、計画の半分も進まないうち、非常な紙数になつて了つた。かりに前

篇と名づけたもの、勿論此だけでは何等の纏まりもないのである。単にChapterの切れ目に達したから、此処で一と画り付けたのに過ぎない。いづれ來年の春頃から再び稿を継ぐ事にする。

ここでは『葵』中絶の理由を、分量の問題にあると表明している。さらに単行本『葵』刊行にあたって、『葵序』という文章が綴られ、そこには『葵』の全編はどうしても半年か、八九ヵ月くらい連載し得る分量を持つて居るやうだ。そこで「先づ三分の一を纏めて、マダマ」として刊行すると決めた。」と記されている。しかし、残る三分の二は、ついに發表されることはなかった。明治四十四年十一月号「三田文学」において永井荷風の激賞を得、同年十二月に初めての単行本が出版されるという、青年期における華々しい時期に、谷崎は『葵』を執筆した。さて、単行本『葵』刊行後、ほぼ二年を経て、単行本『麒麟』が刊行された。これは、その時期までの谷崎の全作品を収めるべく刊行されたものであるが、『葵』は収められていない。谷崎は、『葵』を省い

た理由を、その「序」に、「『愛』は世評の多くが一致する如き愚作なりとは信じ難きも、固より貧弱なる未完物にして、予の私かに期する所は寧ろ彼の断片以後の部分に存したり」と記している。

つまり、未完の上に、物語の運びのヤマ場にも至っていない、ということである。では、谷崎は「愛」をどのような作品にする積りだったのだろう。何を書こうとしていたのであろう。先行の論の中で、「愛」を単独で論じた小沢牧久は、モチーフに論を進め、「愛」は主人公宗一の一大性愛変遷史を「浪漫的」な筆致においてではなく、「写实的」な筆致で書こうとした作品だったのであり、前作「悪魔」について谷崎の言った「写实的な試み」を受け継いで、その試行を更に一歩進めようとしたはずの作品だったのである。——中略——「愛」は、その構想においても、筆致・作風においても、谷崎潤一郎の文学的行程の中で最初の頂点を形成するはずの作品であつたのだ。」との見解を示し、「愛」が、「痴人の愛」に連続して行くファクターを内在させていたのではないかとしている。私は、「愛」が主人公の一大性愛変遷史を写实的に描いた作品である、という見解に、納得できる。そして、「愛」が、「痴人の愛」の作品的構造の裏面に連続しているのではないか——という提言にも同意できる。

小論では、「愛」に登場する女性たちの形象を検討し、それらを論拠に、「愛」が未完の中絶作であり、伊藤整の示した、「愛」は中絶になっているとは言え、主人公の心理的崩壊の起るまでを

一貫して描いているので、ほとんど完結していると言ってもいい作品である。」という見解が無謀なものである、ということを示したい。さらに、中絶したまま放置された原因を考察する。

二

「愛」には、主人公である一高生・橘宗一をめぐる、何人かの女性が登場する。宗一の恋人・岡田美代子。後輩・佐々木の片恋の相手となった、宗一の幼馴染・浅川静。宗一の友人・山口の情人で煙草屋の娘・お梅。

佐々木の婚約者だった春子。静の友人・お勢。主だった女性の登場人物といえ、このくらいである。まず、宗一の恋人・岡田美代子について考察する。彼女の実家・岡田家は、宗一の家・橘家と遠縁に当る小田原の資産家である。

美代子の父、清助と云ふのは、商売にかけてはなか／＼抜けない代り、若い時分から放蕩の限りを盡して、二三人の妾もある上に多勢の子を孕ませ、其れがみんな一軒の家に同居して居た。(一)

これが、岡田家の様子であり、美代子はこの家でただひとりの嫡子であった。そのため母親に溺愛され、過保護に育てられた。作品に登場する美代子は、装いに贅を凝らし、

うすいお納戸の絹織の単衣に、白っぽい紋紗の丸帯を締め、細い金の提灯鎖を頸にかけた十七八の令嬢姿に、男も女もち

ろく／＼と餌を与へて、一挙一動にも眼を放さないやうであつた。(一)

と、いうのが、初めて作品に登場した時で、次に登場する時には、

あらい大島の亀甲緋の対の着物に、金春織の白茶地に花丸

模様の丸帯を締め、銀の平打を挿した高島田の風情(五)

という様子であつた。いずれも高価なものをきらびやかに着こなしている。そして、美代子は、この当時には珍しい、女学校出なのである。父親に勧められ、遠縁の橘家に下宿し、「虎の門」に毎日通つた、と(一)にある。

この「虎の門」というのは、現在東京都渋谷区広尾にある、東京女学館のことである。

東京女学館は、明治二十一年創立の、私立の女子中等教育機関である。創立趣旨は、「伊藤博文陸奥宗光等新に二十万円の資金を募りて府下に一大女学校を起し、教授寄宿の模倣一切、純然たる洋風婦人を養成せんとす」というもので、教育理念は、「本館ハ日本婦人ヲシテ欧米ノ婦人ノ享有スル所ト同等ノ教育及ビ家庭ノ訓練ヲ受ケシムルヲ以テ目的トス」というものであつた。「寄宿生規則」条項には、「一、館内ノ生活ハ英國中等以上ノ社会ノ風ニ則ルベシ」とある。東京女学館の教師の定員は九名で、うち七名は英國女性であつた。

日本人教師に関する資料は残っていないが、英國人教師については、名前、年齢、経歴が、設立願書に添付されている。彼女た

ちのうち、二名がケンブリッジ大学卒、他に二名がロンドン大学卒、とある。彼女たちは、英國の、ハイ・レベルなインテリ女性だったのである。「当時もつとも金のかかる学校であつた」と、東京女学館が記されていることも、頷ける。美代子が東京女学館に入学したのは一九〇三年と思われる。少し前の一九〇〇年当時、日本女性の女学校進学率は、〇・八%に過ぎなかった。このような背景のもと、わざわざ東京に遊学した美代子は、かなり裕福な育ちとみることができる。主人公・宗一は、一高生というエリートで、「好い顔だち」(二)をしており、美代子にとって、不足のない恋の相手であつた。宗一が療養先から帰京する汽車に上りし合せて乗りこんだり、つれない手紙を出したから宗一が怒つたのではないかと氣に病んで突然上京したり、美代子は、当時の良家の娘としては、大胆な行動をとる。

宗一を自分の虜にしたいという意欲の顕われであらう。そのくせ、いざ会えると、ホームで見送らうとする宗一を拒んだり、電車に乗る時同じ車から乗りこまないようにと宗一に指示したり、相手には節度を求める。そして宗一にせがんで、宗一の父を通じて正式に縁談を調えようとするのである。美代子は、裕福に育ち、高い教育を受けた堅実な女性である。交際しても、たやすく宗一に触れさせない。宗一の後輩・佐々木の婚約者だった春子など、女学生なのに、「Shake hand Kissは何度したか知れません」(八)という状態であつた。美代子は「薔」に登場した時には、もう女

学校を卒えていた（二）が、宗一に触れるのは、（五）の、別れ際の握手だけである。

【箋】に、美代子が登場するのは、（二）と（五）だけである。

宗一と美代子の縁談は、不調に終る兆を見せている。そして、この破談は、宗一の、一大性愛変遷史の発端になっている。こうして美代子の形象を追っていて興味深かったのは、それまでの谷崎作品には出てこないような、節度のある、常識的な女性であるところだ。そして、それにもかかわらず、結果として宗一を（墮落）へと導いた点である。

三

次に、宗一の後輩・佐々木の片恋の相手となった、浅川静について考察する。宗一は、明けて二十二歳になった正月七草の頃、佐々木をつれて浅川家の骨牌会に出かけた（十）。

その家の娘・静の形象は、宗一と同年齢くらいの、二十一とされたうえで、

すらりとした鶴のやうな撫で肩へ、地味な緋の大島お召しの羽織を纏って銀杏返しの鬘の毛をふるはせながら、きれいな、メタリックの声を出す様子と云ひ、引き締まった目鼻立ちと云ひ、新派の喜多村にそっくりの女である。（十）

と描かれている。美代子のような華やかな装いでないところが、下町娘らしく、却って粹である。喜多村ばりの美貌の上、中味の

方もなかなか粹で、骨牌会のみやげの描引に掛く謎の文句に、「昼は消えつ、物をこそ思へ」として、電燈の球が当るように考えついたりする。容姿だけでなく、このように機知に富んだところも、佐々木を虜にする要因となった。

佐々木は、妹の友人・春子と婚約していたが、性格の不一致を理由に、破談にした。

僕が彼の女に飽きた原因は、どうしても性格の相違する点にあるんです。だん／＼附き合っていると、そりやナカ／＼喰へない女なんですよ。まあ、まるで僕なんぞとは別世界の人間ですね。僕に対する素振にしろ、仕打ちにしろ、一々政略の細工を持って居るんです。（八）

佐々木は、宗一に、破談の理由となった春子の性質を、このように語った。そして、静は、それとは対照的な性格を、佐々木に示す。

佐々木は、静を知って半月もたたぬうちに、切なる恋におちた、と、宗一に便りを出し、静について、以下のように記した。

私は江戸児の美点とも云ふ可き公明淡泊なお静さんの性質を、寧ろ幽痒く感じて居ます。お静さんは男に向って冷酷だと思へる程淡泊でテキパキして居ます。——中略——私ばかりか、誰に対しても寸毫の城壁を設けず、嬌羞を帯びずに話されます。（十一）

このように、静は媚を売ることなく、周りの誰とも公平に一定

の距離を保ちながら社交性を示す、都会的な女—という形象を持つ。

その美貌は、かなり人目を惹くものであり、宗一が、野村、中島、杉浦といった衆寮の友人たちと、歌舞伎座へ芝居見物に行き、浅川一家と佐々木が西の棧敷で見物しているところを見かける場面(十二)で、野村たちは揃って静の美貌に感心する。彼らは、宗一が静の知人であると知るや、その素姓をあれこれ尋ねる。美代子と同窓と聞いて、どちらが美人かときかれた宗一は、片時も忘れずに美代子を慕う身でありながら、「美代子なんか、とても比べ物にならない。」と断じている。幕間に、静は宗一と劇評を戦わせ、芝居通であることも示している。つまり、静は、殆ど欠点のない女として描かれているのである。佐々木に対して、静は、高等商業に通う一歳年下の弟・良作の友達になつてもらいたくて、何かと親切にする。しかし、佐々木にそれ以上の想いは抱けない。弟を通じて佐々木に求婚されても、「田舎は嫌だ」とあつさり断る。姉の拒否したことを、良作は佐々木にはつきりとは伝えられず、「話す機会がない」と、言い逃れをする。(十三)二ヵ月あまりも、この言い逃れに遭って、さすがに失恋を察した佐々木は、痛手を負つて旅に出た。春休みが終り、学校が始まり、四月下旬になつても、佐々木は学校に戻らない。旅の途中、佐々木は宗一に頻々と便りを送るが、最後の手紙は、四月下旬に伊豆の伊東から寄越す。それには、

「一と月に近い旅行の間に、私はさまざまの事を覚えしました。どうにでもなれと云ふやうな心地になつて、通りすがりの宿場々々の情を売る女共に身を任せる事をさへ、厭ひませんでした。—あ、何といふ浅ましい我になつたのでせう。—いつそのまゝ、旅の空で野たれ死にしまつた方がいゝくらゐです。……(十三)

と書かれていた。宗一は、これを読んで、墮落と廃類とが、自分ばかりでなく、佐々木の身の上にも附き纏つてくるようだと感じる。

こうして佐々木を失恋させ、(墮落)させた静は、美代子と同様、高い水準の教育を受けた、常識をわきまえた娘である。佐々木に親切にしたのは、特別な意図からではなく、弟の友達に対する自然な優しさに拠るものであった。持ち前の美貌と、性格の魅力で、静は佐々木を虜にし、求婚を拒むことで、佐々木を(墮落)へと導いた。

四

宗一と佐々木を(墮落)に導いた美代子と静は、谷崎の『鍵』以前の作品には珍しい、常識をわきまえ、道徳を守るタイプの女性たちだが、彼女達以外に、無軌道で不道徳な女性も『鍵』には登場する。小論二で名を挙げた、春子、お梅、お勢である。作品に登場する順に、考察する。まず(三)に登場する、春子である。

春子は、兄と共に姫路から東京に進学している。彼女は佐々木の妹の学友であり、その縁によってか、佐々木と交際を始めた。

佐々木は、春子と約束だけ取り交わし、一二年後に結婚することになると思う、田舎の家で披露をするから、その時は招待する——などと宗一に、(三)で話す。この(三)には、春子の形象は全く描かれていない。次に春子が登場するのは(八)である。

(八)の冒頭の、宗一宛の佐々木の手紙に、春子の形象は以下のように記される。

春子との Marriage 問題は、遂に破談と相成候。——中略——

要するに春子の性格が小生の妻として甚だ不適当なるを発見したる結果に外ならず候。彼の女は小生如き愚直一徹なる人間の妻たるべく、余りに伶俐にて、度胸が好すぎるやうに覚え候。寧ろ外交官の夫人にでもなりて、欧州の交際界に押し出し、数多の男子を手玉に取る方が其の本領に候可きか、もとく小生などの思ひを懸けたるが誤りに御座候。(八)

そして、小論三に摘記した通り、佐々木は、宗一に春子の好ましくない点を話し、すんでのところ春子に誘惑されて関係を結ぶところだったと告白する。それを聞いた宗一は、「事に依つたら、もう Virgin ぢやないんだらう。」と云い、佐々木も「さあね、随分そんな疑ひも起りますね。」と応じている。次に、(七)に登場する、お梅を考察する。お梅は、衆寮の仏法科の生徒・山口と関係する。山口は、宗一の友人・杉浦と親しく、杉浦に、「始終

女郎買ばかりして、向陵の健児の面汚しを一手に引き受けてる男」(四)と紹介されるような、無頼者である。彼はお梅と関係したことを、杉浦や宗一に、「わしゃ当分吉原へ行かんと済む事になった。」と自慢する。そして、お梅のことを、「美人ぢやないが、ポッチャリしてちよいと可愛いんぢや。わしゃ少し其の女に惚れとるがな。まあ君も一緒に来て見給へ、お職を張つとるだけになか／＼利口なやつだぜ。」と云い、「けれど Virgin でないことは確かなんぢや。大胆な女子ぜ。」とも云っている。杉浦と一緒に山口についていった宗一は、お梅を、

お白粉をこてこて塗り着けて居るにも拘らず、面長の両頬が痛ましく瘦せて、骸骨の飛び出た、額の抜け上がった、疲れたやうな容貌の女である。撫で肩のきゃしゃな體つきが粹だと云へば云ふもの、赤い髪を銀杏返しに結つて、古ぼけた双子の綿入を着た様子は、何処となく焦つていて汚らしく、笑ふ度毎に鰓を露はにして、赤く爛れた眼瞼の奥から、細い瞳を光らせるのが、気のせみか、いかさま男狂ひでもしさうに見える。(七)

と、捉える。宗一は杉浦に、「あの娘が出来た為めに、女郎買を止めると云ふんだから、女郎買の下らなき加減も以て推す可しだよ。」と耳打ちをするくらい、お梅の形象に、「夥しい Distillation」を感じた。(九)にいたつて、杉浦と一緒に宗一の実家を訪ねてきた山口が、お梅の正体を明かす。お梅は、帝大の学生に惚れら

れ、学費を出させて、貧しい家庭に育ちながら、女学校へ通っている。帝大生は、お梅と婚約したいがためにそこまで世話をしているし、お梅の父親もこの縁談をまともようとしているのだが、お梅は不服で、山口に惚れている。これに対し、山口は、「関係のあったのはわし斗りぢやないんぢや。ありや恐ろしい淫婦ぢやがな。」と自分とお梅との関係を軽んじ、お梅のバトロンである帝大生に露見しない限り、関係を続けると宣言し、「判りさへせんけりや、当分吉原へ行かんでも済むだけでも得ぢやらうがな。」と、結ぶ。こうして形象をたどると、『藝』における淫婦の第一位は、このお梅ということになるか。

最後に、(十)に登場する、お勢について考察する。お勢は、宗一や静と幼な馴染の下町娘である。宗一が、佐々木をつれて浅川家の骨牌会に出かけ、玄関に上がったところ、

丁度突きあたりの芭蕉布の唐紙の、一寸ばかり開いた隙間から、ずらりと居並んだ令嬢達の花やかな衣服の色彩が、細長い六歌仙の縦絵のやうに窺はれた。すると忽ち、其の絵がお納戸地の縮緬の羽織で一杯に塞がれたかと思ふと、冴え冴えした、黒味がちの円い瞳が、白い頬を襖の縁へ押し着けて、一生懸命に此方を隙見して居る。佐々木は極り悪さに下を向いた。

「お勢ちゃん、何をしてるんだい。」

宗一はかう云つて、瞳を追ひ駈けるやうに其処を開けると、

座敷の中へ入った。

矢庭にお勢は畳へ突つ伏して、「おほ、ゝ、ゝ。」と頓狂に笑ひ崩れた。二十前後の、発達し盡した豊かな肩の肉が、笑ひを堪へると息づかひと一緒に、背筋のあたりがグリ／＼と力強く動いて居る。(十)

と、お勢が登場する。この登場の仕方だけでなく、お勢は数々の奇抜な行動を、『藝』の中で披露する。一高の生徒が好きだからと、本郷通りでわざとハンケチを落として後ろから来る一高生に拾わせたことを、一座の澤崎という男に暴かれたり、骨牌をとるにも、

初対面の佐々木だらうが、宗一だらうが、お勢にかゝると散々に鼻毛を抜かれ、容赦なく引つ掻かれるやら、組み付かれるやら、打たれるやらした。

という有様で、通り一遍のお転婆ではない。

ここで考察した三人の女は、いずれも主人公・宗一にとって、直接関わりのない存在である。しかし、彼女たちこそ、『藝』以前の谷崎作品に登場する女主人公たちの末裔なのである。勝負、高圧的、驕慢、男を男とも思わぬ振舞い、眼に力がある、淫乱、などの特徴を殆ど受け継いでいる。これらの特徴は、美代子や静にはみられない。美代子や静は、『藝』においては、前座にすぎなかった。ただし、ここで考察した三人の女では、真打ちとしては、役不足である。『藝』には、主役にふさわしい女性が登場し

ていない。「痴人の愛」におけるナオミがいないのである。この点が、「癡」の中絶作であることを示していると私には思われる。

五

静とお勢の登場する、(十)に、浅川家の骨牌会の場面がある。骨牌会といえば、尾崎紅葉の「金色夜叉」前篇(一)の二の、富山がお宮を見初める、箕輪家のものが想起される。

当時、若い男女の集う骨牌会は、色々な家庭で行なわれたらしく、箕輪家の会のように、嫁選びの場として機能することもあったであろう。正月に行なわれることで、その場の空気は似通っているらしく、それぞれ、

蠟燭の炎と炭火の熱と多人数の熱帯と混じたる一種の温気は殆ど凝りて動かさる一間の内を、苺の煙と燈火の油煙とは互に纏れて渦巻きつゝ、立迷へり。(「金色夜叉」前篇(一)の二)

煙草の煙や炭火の熱が、少しカットする様に窺って居た。

(十)

と描かれている。前者が「読売新聞」に載せられたのは、明治三十年一月のことであるから、十五年の隔りがあり、前者がランプ、後者が電燈のもとで行なわれているというちがいはあるものの、その場の雰囲気は似通っている。両方の作品とも、テーマの一つに、「舊生の墮落」を扱っている点も似ている。

さて、その〈墮落〉であるが、「癡」における〈墮落〉は、ひとえに童貞を失うこと、性愛上の純潔を失うことである。小熊牧久が指摘しているように、「癡」の新聞連載は、(十一)までの部分であり、(十二)と(十三)は、単行本「癡」のために書き下ろされたものである。私の印象に残った両者の相違点は、(十二)までの部分では、主人公は、「宗一」と記されているのに、(十二)と(十三)では、「橘」と、姓で記されている点である。主人公は、前者においては、「ビューア」(四)と称する童貞であり、小熊の論^⑤において「癡」中のキーワードとされている、「美代子」はどうして居るであらう。」というモノローグをくり返す。山口の後について廊へ出かける宗一は、

今夜の様子を美代子が知ったならば、何と云ふだらう。彼女との仲を割かれた結果だと云ふ事が、何の云ひ訳にならう。自分が斯うなる代りに、美代子がこんな真似をしたら、自分はどんな気持がするだらう。(十二)

と思う。しかし、それ以後、美代子に関わるモノローグはなくなる。宗一は、童貞を失うことを、「全身に麻痺薬をかけて物凄いい手術を受けて居る人間のやうに自分を思った」のである。本来は、正式に美代子と夫婦になって契りを結ぶ積りだった宗一は、それが叶わない兆を感じ取り、自暴自棄になって、廊へ出かけ、童貞を失ったのである。そのような変容を経たため、「宗一」から「橘」へと主人公の呼称を改めたのであろうか。純朴な舊生が、

ありきたりの男になった、ということであらうか。『**葵**』における(墮落)は、それまでの谷崎の作品に描かれた(墮落)に比べて、随分軽い。『麒麟』の霊公は、夫人・南子の悪徳の魅力に負け、王者の徳を以て国を治めよと説く孔子を遠ざけ私の慾に溺れるという墮落を見せた。『鴈風』の直彦は、童貞を失った時に会った娼婦に入れこみ、骨抜きにされ、彼女ゆえに斃れてしまったという、命がけの墮落を見せた。『悪魔』の鈴木は、幼い頃は秀才とうたわれたものの、許嫁同然の照子に誘惑され、飽きられ、裏切られ続けて、精神に変調をきたし、ついに人を斬るという犯罪をおかすまでに墮落する。『**葵**』が中絶のまま放置されたのは、(十三)までに記されたような、生温かい(墮落)を、もっと壮絶な、それまでの作品に書かれたような、或いはもっと強烈な墮落へとふくらませるための物語を、分量的にも、内容的にも壮大に作らねばならず、そのための構想を練ることに窮したためではなからうか。谷崎は、『**葵**』執筆当時、神経衰弱を再発させ、徴兵検査に不合格となるような健康状態であった^⑧。また、(十)に骨牌会、(十一)に歌舞伎見物の場面を作っているが、いささか先行の明治文学、殊に尾崎紅葉の作品と趣向が似ており、コンヴェンショナルに陥ってしまったきらいがある。こうしたところも中絶したまま放置された要因ではなからうか。そういえば、小論四で考察した女性たちの一人に、お勢という下町娘がいたが、この、「お勢」という名は、『葉亭四迷の「浮雲」の女主人公と

同じである。威勢がよく、負けず嫌いなところも、同じと見える。色事がらみで墮落する書生、という主人公の設定も、コンヴェンショナルであり、この辺りも行き詰った原因となつていよう。とにかく、『**葵**』は、完結にはほど遠いまま、放置された作品なのである。小論一に示した伊藤整の論の外に、「題材の選択にも問題があり、潤一郎という作家の本来の資質からは離れたところに生まれた失敗作^⑨」という捉え方、「純愛物語が一輪狂い咲きした感じ^⑩」という捉え方もあるが、これらは、『**葵**』を完結作と決めてつけて論じたものであるといえる。『**葵**』を「写实的」と評したのは岡崎義恵^⑪であるが、全くの「写実小説」と捉えてモデルを詮索し、主人公と谷崎の相違点まで考証した論もある。だが、背景や小道具、表面的な人物たちの形象に多少現実をとり入れてはいても、根本的にはフィクションであるという見解を、私は持つ。ところで、『**葵**』には、作品の設定年を想像させる記述がある。

歌舞伎座の春の狂言が、十四日に蓋を開けたので、初日から五日目の日曜日に、野村は中島と杉浦を誘ひ、西の花道に近い平土間へ陣取つて居た。——中略——源平布引滝の中幕が開くと、揚げ幕の向うから、羽左衛門の実盛、猿之助の瀬尾が、頭の上の花道を歩いて来る。——中略——今度は仁左衛門の「鰻谷」である。(十二)

これは、『演芸画報』第四年二号(明治四十三年二月号)によつて、明治四十三年の正月興行であることがわかる。初日、配

役も全くそのまま記されている。(十二)に、静が猿之助の瀬尾を貶し、「今度は團藏が演る筈だったのに」と言う場面があるが、確かにこの興行の予告には、「瀬尾十郎(團藏)」「演芸画報」第四年一号、とある。これに拠って作品年代を探ると、明治四十二年夏から四十三年晩春まで、ということになる。当時の谷崎の周りの衆寮の生徒たちは、歌舞伎に通じることには熱意を持っていたようで、一高入学後間もない頃の谷崎は、授業中に教科書の中に近松の浄瑠璃全集を重ねて「極めて快速に」読んでいたという。「葵」の登場人物たちも、役者の評判をしきりにしている。近松を読み漁り、芝居小屋へ通った谷崎は、丸本物を好んだのであろう。ところで、作品のタイトル・「葵」とは何を意味するのか。「葵に凝りて胎を吹く」という諺から採ったと考えると、懲りて胎まで吹き冷まそうとさせるくらい、煮えたぎった、苦痛を与えるほど熱いもの、となる。

異性探究への若者の熱意—なのであろうか。

注

- ①「東京日日新聞」(明治45・7)
- ②「東京日日新聞」(大正元・11)
- ③単行本『葵』(春陽堂 大正2・11)
- ④「谷崎潤一郎氏の作品」
- ⑤短篇集「刺青」(親山書店 明治44・12)

⑥植竹書院 大正3・12

⑦「葵」論—その構想と位置をめぐって—(論考谷崎潤一郎) 桜楓社 昭和55・5

⑧「谷崎潤一郎全集」新書版 第二巻 解説(中央公論社 昭和33・3)

⑨「妾見のうつし」(『女学雑誌』明治28・11)

⑩「都史紀要9 東京の女子教育」(東京都 昭和36・11)

⑪小論五に示した設定年に拠る推定。

⑫「日本近代教育百年史」第四巻(国立教育研究所 1974・3)

⑬明治40・「狎の葬式」「うろおほえ」「死火山」

⑭42・「象」[The Affair of Two Watches]「刺青」[麒麟]

44・「信西」「彷徨」「少年」「風」「智閑」「秘密」

45・「悪魔」「あくび」

⑮喜多村 緑郎(1871-1961)

新派の女形役者。本名・六郎。当り芸は、「婦系図」のお馬など。著書・「芸道礼讃」、「わが芸談」(『演劇界』平成元・7)

⑯⑦に同じ。

⑯「谷崎潤一郎全集」第二十六巻「年譜」(中央公論社 昭和58・11)に
 掲る。

⑰「三人妻」、「多情多恨」、「金色夜叉」。

⑱書生の女性ゆえの墮落を描いた物に、坪内逍遙「当世書生気質」、⑰の「金色夜叉」などがあり、粗筋としてはパターン化する。

⑲橋本杢一郎「谷崎潤一郎の文学」(桜楓社 昭和42・7)

⑳橋本杢一郎「そのマンソリズム」(八木書店 昭和49・4)

㉑「明治文学史」文芸編(洋々社 昭和28・12)

②津島寿一「谷崎と『巖』」〔文芸〕昭和31・3

君島一郎『榮一番室』(時事通信社 昭和42・12)

③津島寿一「谷崎潤一郎君のこと」(芳塘刊行会 昭和40・3)

付記・小論において、詳しく触れることができなかった、谷崎の初期作品における〈墮落〉について、同時代の作家の作品におけるそれと比較しながら、今後考察を深めていく所存である。

(同志社大学大学院博士課程)